



ナースの頑固道がんこみち

〈埼玉県〉 小松崎 有美 33歳

「緊急入院です」。私が精神科に担
ぎ込まれたのは去年のことだった。
病名は摂食障害。体重が増えること
を恐れて水さえ飲めなくなっていた。
しかもこのとき妊娠7カ月。母親の
命と赤ん坊の命。2つの命が危機的
状況にあった。

真つ青な私とは対照的に看護師さ
んは太陽のようだった。その日から
出産まで二人三脚が始まった。まず
体重を増やすために毎食チョコモラン
マのような白米が出された。しかし
半分は机の引き出しに隠す。それで
も看護師さんが来たとき、その黒い
目はいっそう黒く光った。おなかに
聴診器を当て、「ママ、おかわりつ
て言ってるよ」。そう言うのだ。さ
らに「私はね、看護師だけ頑固師

なのよ。絶対死んでほしくないの」
と続ける。それを聞いて引き出しを
開けずにはいられなかった。

それからというもの、巡回の際に
は必ず聴診器でおなかの「声」を聴
いてくれた。さらに私のことを「マ
マ」と呼んでくれた。それによって
私は一歩ずつ母親になっていった。

しかし、日がたつにつれ、出産へ
の恐怖が強くなった。これまで満足
に食事を取らなかつたことで赤ん坊
に何かあったらどうしよう。ああ、
私は母親として失格だ。

予定日が近づくにつれ、気が遠く
なる。あるときでもたつてもいら
れず、ナースコールを押しした。不安
な思いを打ち明け、泣きながら、「お
母さん。お母さん」と言った。このと

きなせ「お母さん」と言ったのか。今
考えると看護師さんが母親のような
温かい存在になっていたからだと思
う。

そのとき、看護師さんが出したの
は聴診器だった。最後の聴診器は私
の胸に当てた。そして私の心の「声」
を聴いてくれた。「つらかったね。
大丈夫よ。赤ちゃんも大丈夫。ここ
まで来たんだから、わがままにママ
になりなさい」

これが彼女の信念。そして頑固
道だ。私はこの言葉で覚悟を決めた。

そして母親になった今、うまくい
かないときでもずうずうしく前を向
ける。そう思えるのもやはり、あの
頑固師さんのおかげである。